

TOUR DE HOKKAIDO 2005 NEWS

4th Stage 2005年9月18日発行

区間個人順位

順位	名前	チーム	タイム
1	エディー・ラッティ	NIPPO	4:29:43
2	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	+0:52
3	ジャン・スズジャ	韓国	+0:52
4	鈴木真理	プリチストン・アンカー	+0:52
5	清水裕輔	プリチストン・アンカー	+0:52
6	ダニル・コムコフ	ロシア	+0:52

個人ポイント賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	68
2	エディー・ラッティ	NIPPO	67
3	ティロ・シュラード	ドイツ	45
4	清水都貴	プリチストン・アンカー	44
5	マーク・A・ウォルターズ	カナダ	34
6	岡崎和也	NIPPO	34

団体総合順位

順位	チーム名	タイム
1	NIPPO	54:17:14
2	愛三工業	+4:31
3	プリチストン・アンカー	+6:29
4	シマノ	+6:47
5	韓国	+8:56
6	ミヤタ・スバル	+9:13
7	キナンCCD	+9:38
8	ロシア	+10:12
9	北海道地域選抜	+12:02
10	日本大学	+14:45
11	ドイト	+16:24
12	チャイニーズタイペイ	+17:29
13	カナダ	+20:37
14	ラバネロ	+22:32
15	法政大学	+28:40

個人総合時間順位

順位	名前	チーム	タイム
1	エディー・ラッティ	NIPPO	18:03:32
2	岡崎和也	NIPPO	+2:32
3	清水都貴	プリチストン・アンカー	+2:41
4	狩野智也	シマノ	+2:56
5	新保光起	愛三工業	+3:01
6	別府匠	愛三工業	+3:40

個人山岳賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	エディー・ラッティ	NIPPO	31
2	別府匠	愛三工業	30
3	新保光起	愛三工業	8
4	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	7
5	盛一大	愛三工業	7
6	田代恭崇	プリチストン・アンカー	7

4th.stage エディー・ラッティ (NIPPO) が圧勝。個人総合時間賞に王手

第4ステージのスタートは9時。天気予報どおり冷たい雨が降っている。エフゲニー・ペルミノフ（ロシア）、木下渉（北海道大学）、米山一輝（ラバネロ）の3人がこの日最初のアタックを決めた。悪天候にもかかわらず集団からアタックが繰り返される。

エディー・ラッティ（NIPPO）を含む逃げが決まった。エリンコ・ツィン（ドイツ）、別府匠、広瀬敏（愛三工業）、狩野智也、阿部良之（シマノ）、橋川健、日置大介（キナンCCD）、佐野友哉、清水都貴（プリチストン・アンカー）、木下渉が入っている。さらにパクサンバク（韓国）が追いつき先頭集団を形成。最初のホットスポットを通過した時点でタイム差は1分50秒に広がっていた。最初のKOMは、1位別府匠、2位ラッティ、3位阿部、4位狩野で通過。補給所をすぎたところで、別府匠がアタック。ラッティ、パクサンバクの3人が先行する。このスピードアップで木下渉が先頭集団から脱落。さらに橋川、日置も遅れて先頭は9人に。

最後のKOMに向けてペースが上がる。山頂通過時に先頭は6人。別府、ラッティ、清水（都）、パク、狩野、佐野。2度目の山岳ポイントは1位別府、2位ラッティ、3位清水



コミッセルパネルの小野盛秀さん（北海道自転車競技連盟理事長）がバレード区間の赤旗を振る

（都）、4位狩野。最後の山岳ポイントを別府が果敢に攻めたが、ラッティが2位で通過したことでラッティの山岳リーダーが決定した。

下りで別府と佐野が遅れて先頭は4人に。メイン集団とのタイム差は3分以上。メイン集団は愛三工業が引いている。

ホットスポット後メイン集団先頭に上がったミヤタ・スバルも追撃に加わり、タイム差が35秒まで詰まった。



4人の強力な逃げと集団との差が35秒まで縮まると、エディー・ラッティ（NIPPO）がラスト10kmを切ってアタック！第1ステージの再現だ～！

残り10kmになったところで、リーダー・ジャージのラッティがアタック。狩野、清水、パクはあきらめメイン集団に吸収される。ラッティは単独でタイム差を広げ、なんと第1ステージに続き、逃げ切り優勝を果たした。

さらに集団スプリントはマリウス・ヴィズィアック（NIPPO）が制し、今年2度目のNIPPOのワンツーフィニッシュとなった。

5th.stage NIPPOの完全勝利を阻止できるチームはあるのか？

NIPPOの強さだけが印象づけられた今大会もいよいよ最終日を迎える。ここまできたら、最後までNIPPOの力を見せつけてもらいたい。第4ステージを見てもわかるように、余裕のタイム差で総合首位の座につきながら、集団ゴールをいさぎよとせず、ともに逃げてきたいわば戦友を置き去りにしてでもアタックをかけ、単独「ぶっちぎり」でゴールを決めたほど、首位のラッティと大門監督に「これだけいい」ということはない。「どんなに勝っていても最後に落とせば意味がない、そして、最後まで何が起こるかわからないのがロードレースだ」とは大門監督が口癖のように話していることだ。2年前に廣瀬敏（現在・愛三工業）が総合優勝した時も、最終日のクリテリウムでNIPPOはホットスポットを列車

で通過、ライバルにわずかなボーナスタイムさえ与えなかった。そのときは一位と二位のタイム差が比較的少なかったこともあるが、今年も同じようにNIPPO列車が見られる可能性はある。というか、ここまできたら、他の選手をねじ伏せて勝利しなければならないはずだ。それが使命だ。

逆に、他のチームにはこのままでは終わらないという気概を見せてほしいところだ。特に、今大会表彰台にまだ上がっていないチームの面々には奮起してもらいたい。第4ステージ、北海道大学の木下渉が「大学生が連日話題になる中で、うちだけ取り残されていたから」と、総合上位争いの逃げに乗るといっばりを見せた。ほかの選手にはこの走りを手本としてもらいたい。



有力選手で構成された逃げの集団には北海道大学の木下渉が入り、ラジオ・ツールで「学生がこんな逃げの中で走るのとはツールド史上初」と絶賛された